

ハイスクールD×Dサー
ガブレイヴ～馬神弾の
異世界物語～《リメイ
ク》

ブレイヴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類至上戦線『カーディナル・サイン』の首魁…レオス・ギデオンのバトルに勝利した馬神弾だったが…ギデオンは

ブレインコアの力により姿を変え残りの十二宮Xレアを吸収して別の時空へと逃亡…。ダンは、残りの十二宮Xレアを取り戻す為…逃げたギデオンを追うべくその時空に向かうのだが…

目次

序章

プロローグ

1

第一話 「煌臨！超神光龍サジツトウル

ム・ノヴァ」

5

〜序章〜

〜プロローグ〜

十二宮Xレアを持って別の時空に消えていったギデオンを追うべく…同じ時空に向かつていった馬神弾だった…

「……………ここはどこだ？」

ダンが着いた場所は荒地と言うほどの場所だった。

「俺は確かにギデオンを追って来たはずだ…だが、この時空にはギデオンの気配がない…それにこの荒れ具合は…戦争か？」

そう言つて傷跡を見ながら考え始めてその荒地を歩き始めていく

「この傷跡…まだ新しい……それに血の臭いがする…。」

地面の傷跡を触りながらそう呟くと血の臭いがする方向へと足を運ぶ。

「っ!? これは…！」

血の臭いが濃い場所に着くと当たりを見渡すダン…そこで見たものは、沢山の人達？
が傷だらけで倒れており瀕死の状態だった。

「これは…一体…？何があつたんだ？」

傷だらけの羽を生やしている人達を見ながらダンは、近づいていくと…

「ぐあつ…」

「っ！大丈夫か!？」

声が届こえた方にダンは走っていき

「おい！しつかりしろ！」

「うぐつ…に、人間…?」

「ああ…そうだ…つて、そんなことはいい…何があつたんだ？」

「はあ…はあ…はあつ…ここは…人間が来る場所じゃない…早く逃げるんだ…!」

黒い羽を生やしている男がボロボロの身体でダンの服を掴みながらそう言つて

「……断る。」

ダンは服を掴んでいる男の手を離してそう告げる。

「なっ!?!何を馬鹿な事を！早くここから立ち去れ人間がいていい場所じゃないんだぞ!?!
うぐつ!」

男はダンのその言葉を聴いて怒りでそう叫ぶも傷だらけの身体な為、身体に負担がい
き顔を思わず歪めてしまう

「アンタ達を放っておけないし…この先にいるアンタ達の仲間を助けなきゃいけない」
そう言つてダンは男に優しく語り掛けていく

「ただの人間が何を…」

多少小馬鹿するような発言をする男だったが、何故かダンに期待をしてしまう思考を巡らせてしまう

「今の俺は、人間じゃないからな……」

そう言うダンとダンの体内から赤宝石のようなものが浮かびそこから淡い赤い光りを発して傷だらけの者達を包むように光は広がっていく

「うっ……」

少々眩しいのか男は目を瞑ってしまふ……他の人達も同じように目を瞑ってしまひしばらくして光は徐々に消えていったのだった。

「っ!? なっ! 傷が…消えている!？」

男は、自分の身体に変化がある事が分かって驚きながら目を見開いてしまふ。男の声を聴いて他の者達も同じように身体を触りびっくりしていた。

「傷は治したが、身体の負担はまだ残っているから無理せず休むんだな…俺はこの先に用がある。」

ダンはそう言つて気配があるところへと足を進めて行こうとして

「ま、待て!?! 傷を治した事には感謝するが! これ以上は行つては駄目だ!! 死に行くよ
うなものだぞ!？」

思わず男はダンを引き止めようと手を掴む

「死にはしないさ……俺は勝つ事が仕事だからな……今も……そしてこれからも……」
そう言つて男の掴む手を振り払い歩き出す。

第一話 「煌臨！超神光龍サジツトヴルム・ノヴァ」

ナレーション）ダンが異世界に来るまでの出来事を説明しよう…時間は遡り、この世界では…悪魔、天使、堕天使による三つ巴の戦いが行われていた互いに傷つき合い戦争は激化していくと思っていたが横槍するかのように二体の龍が割って入ってくると二体の龍は争い始め…三つの種族を巻き込んで戦いは更に激化していく…やがて三つの種族は、一時休戦し二体の龍に対抗すべく戦い始めるが…力の差を思い知らされ三つの種族の部隊はポロポロになり、瀕死の状態までに陥ってしまう。

サーゼクス「はあ…はあ…」

ミカエル「これほどとは…」

アザゼル「まさに化け物だな…ありや…」

それぞれの代表格の三人はポロポロになりながらも二頭の龍を見つめる

??? 「フン…小虫が…随分と粘ってくれたな？」

白い龍はそう言って鬱陶しそうにサーゼクス達を見て

??? 「だが所詮は雑魚の集団よ…この我々の戦いに水を差した罰をくれてやろう…この

者に裁きをな!」

そうやって赤い龍はボロボロの魔法少女の衣装を着た悪魔に狙いを定め

サーゼクス「っ?!に、逃げるんだ!セラフォルー!!」

サーゼクスは大声でその少女に叫ぶが:

赤い龍「もう遅いわっ!!」

赤い龍は力を溜めた炎をその少女に向かってプレスをしていき

???(「あつ…私…死んじやうんだ…:…ごめんね…サーゼクスちゃん…ソーナちゃん

…」

少女はそう思いながら目を閉じて赤い龍のプレスを受けてしまうのだった…

サーゼクス「セラフォルー!!!」

サーゼクスは大声でその少女の名を叫ぶ

赤い龍「フン…たわいもない…」

サーゼクス「くっ!」

サーゼクスはそのまま力が抜ける様に四つん這いになると顔を歪めて悔しそうに地

面を殴る

赤い龍「んっ…?」

すると赤い龍は何かを感じたのか少女にプレスした場所をみると…

————ガアアアアアツ!!————

大きな咆哮をあげる存在がいた…その存在は弓の様なモノを持った巨大なドラゴンがこの地に降臨するのだった。

—————

ナレーション）巨大なドラゴンが現れる数分前…ダンは、もつとも強い気配がある場所へと向かっていたのだった

ダン「確か…この辺で…っ!?あそこか!」

ダンは強い気配を感じ取ると目の前には二頭の龍とその二頭の龍の周りでボロボロになっている人達を見つける

ダン「あの双龍が原因だったのか…」

ダンはそう呟くと次の瞬間目を見開いたそれは…

ダン「あの赤い龍!あの女の子にブレスを吐くきか!!」

ダンはそう言ってデッキから一枚のカードを出して

ダン「そうはさせない!」

そのカードを掲げて

ダン「天駆ける闇祓う光!超神光龍サジットヴルム・ノヴァ!煌臨!!」

そう叫ぶとダンの背後から光を纏った巨大なドラゴンが現れるとダンと一体化すると球体となつて少女を守る様に赤

い龍のブレスを受けるそして:

「————ガアアアアアアアッ!!!————」

咆哮という雄叫びをあげて無傷のまま二天龍に対峙するのだった

「————セラフォルside————」

私はサーゼクスちゃん達と一緒に暴れている二頭の龍を討伐しようとしていたんだけど:全然歯が立たなくって私達はボロボロになって窮地に立たされているの:ううつ:凄く身体中が痛いよお:そう思い立とうするも赤い龍は私を見つけると力を溜め始めブレスを放とうとしている:嘘つ:避けきれない:怖い:ぶるぶると身体を震わせなんとか逃げようと力を入れようとしたけれど:全然力が入らない:赤い龍はエネルギーを溜め終わると私に向かってブレスを吐き始めた:向こうで私を呼んでいるサーゼクスちゃん:

セラフォル「(ごめんね:サーゼクスちゃん:ソーナちゃん:)」

私は心の中でお友達のサーゼクスちゃんと大好きな妹のソーナちゃんを想いながら目を閉じて赤い龍のブレスを受ける覚悟を決めて…

「……諦めるな……」

…えっ？

「……大丈夫だ…ここは………」

とても優しく…とても暖かい…声が…

「……俺に任せろ！……」

力強くとても頼りになる男の人の声が…私の頭の中に届いた…

「……ガアアアアアアッ!!!……」

セラフォル「っ!？」

いきなり近くからドラゴンの咆哮が聴こえて目を開けるとそこには…

私を守る様にして二頭の龍に対峙する形で弓の様なモノを持った巨大な龍？がいた

…

「……セラフォル said end……」

――

弓の様なモノを握っている巨大なドラゴン： // 超神光龍サジツトヴルム・ノヴァ // が
赤い龍と白い龍と対峙するのだった

赤い龍「貴様っ！何者だ!!」

白い龍「我々に刃向かうきか!!」

二頭の龍は威嚇する様に大声で巨大なドラゴンに問う：

サーゼクス「あの龍は一体：」

サーゼクスは二頭の龍と対峙している巨大なドラゴンを観ながらそう呟く

セラフォル「サーゼクスちゃん!!」

サーゼクスに向かって走るセラフォル

サーゼクス「セラフォル!?!無事だったのか!」

セラフォル「うん!あの大きなドラゴンに助けてくれたんだ♪」

嬉しそうにサーゼクスに話すセラフォル

サーゼクス「あのドラゴンが：」

そう言つて巨大なドラゴンを見つめて

アザゼル「おい!サーゼクス!!」

アザゼルとミカエルがボロボロにサーゼクスに近づいていく

サーゼクス「アザゼル、ミカエル：君達も無事だったんだね？」

二人が安心だと知ると胸を撫で下ろす

アザゼル「まあな：それよりあのドラゴンは何なんだ？」

ミカエル「我々の味方でしょうか？」

二人は訝しめながらドラゴンを見つめてサーゼクスに問う

サーゼクス「それは：」

サーゼクスが自分の友を助けたことを話そうとするももしかしたらただの気分で二頭のドラゴンを倒した後我々を襲うのではないかとそのドラゴンに対して疑ってしま
い言葉を濁す：すると：

セラフオルー「大丈夫♪」

セラフオルーはニコニコした様子でサーゼクスやアザゼルとミカエルを見る

サーゼクス「セラフオルー：？」

アザゼル「何が大丈夫なんだ？」

ミカエル「あのドラゴンは我々の味方ってことですか？」

セラフオルー「うん！だって：あのドラゴンさんは：とても優しくそうな声で言ってく
れたんだもん！俺に任せろって♪」

セラフオルーはそう言って三人に笑顔を向けるのだった。